

神秘学ポエジー 風遊戯
photopos
142

【神秘学ポエジー～風遊戯 第 284集】 photo ヴァージョン
photopos 3526-3550

《2024.5.4～ 2024.5.28》

神秘学遊戯団

考えるために
手をつかう

手で考え
かたちにする

じぶんを
つくるのも
手である

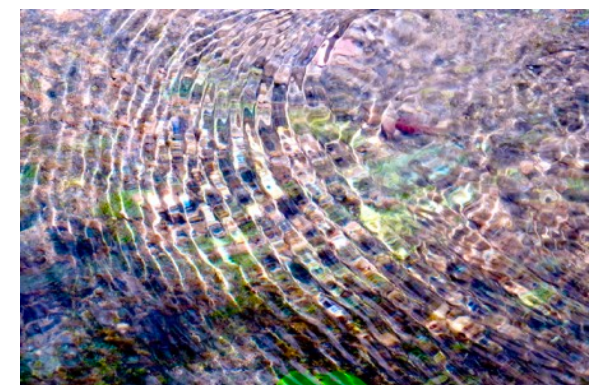
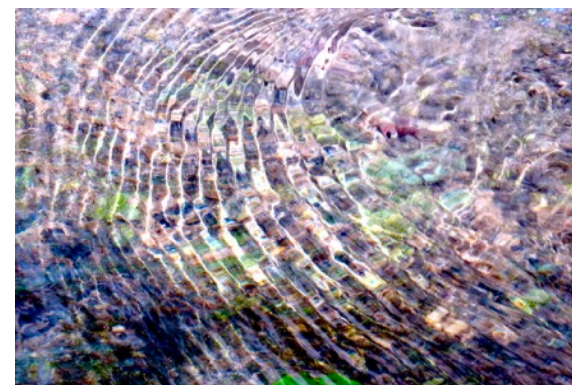
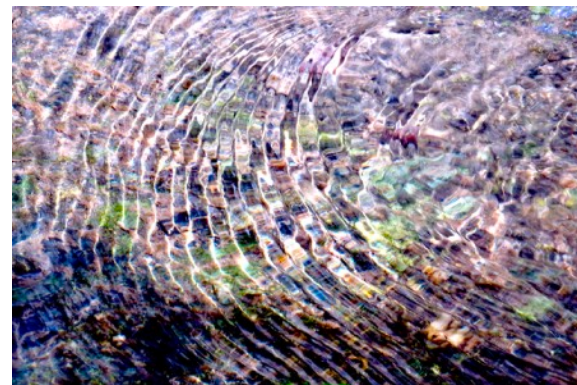
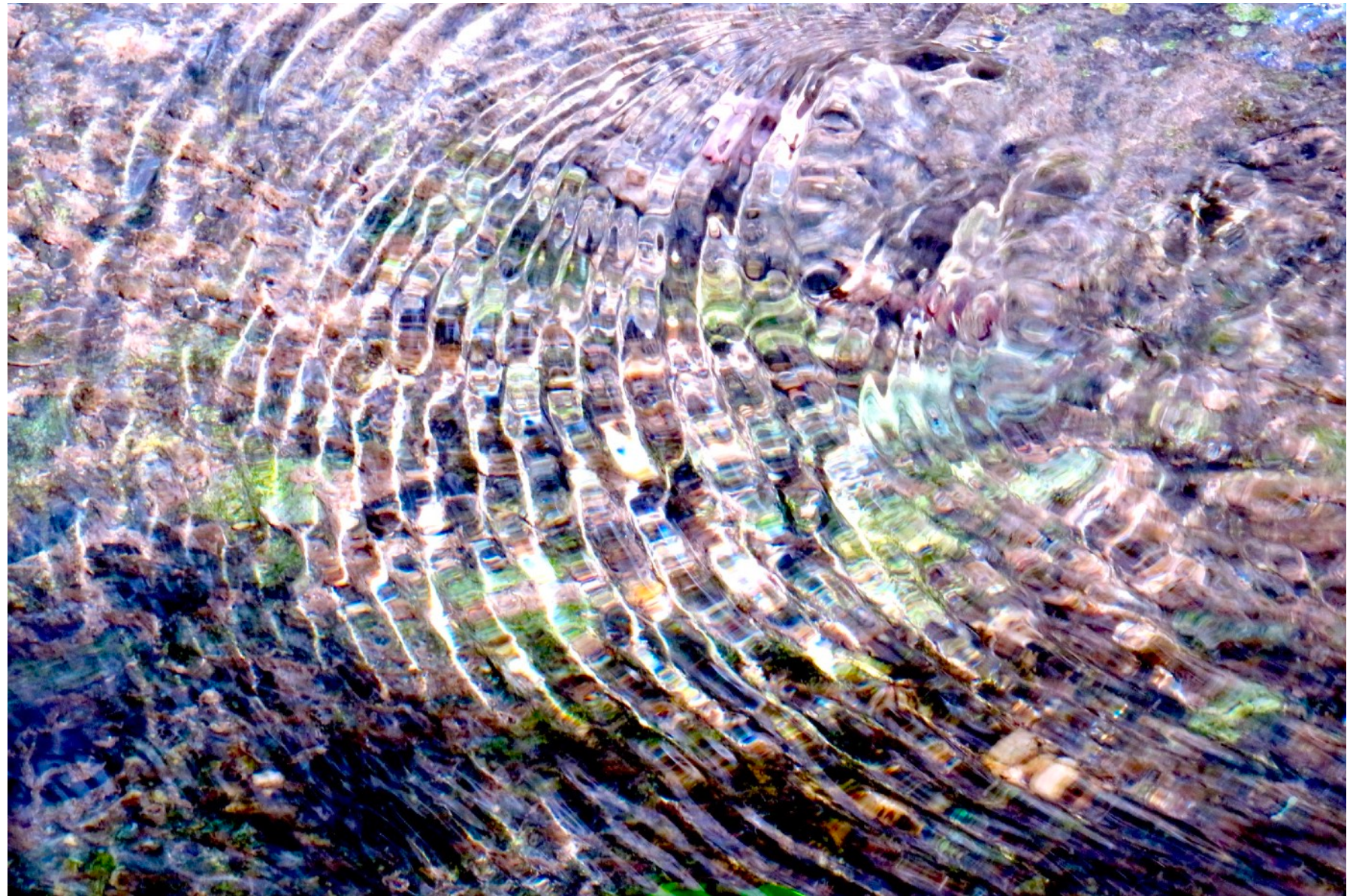
じぶんを
かたちにする知恵は
手で
うけとめなければならない

手のしらないことは
ほんとうに考えることができない
かたちにすることができない

それなのに
手のしらない
考えやかたちが

知ったかぶりで
むずかしそうな
けれどからっぽな
ことばにされていたりする

学ぶための
ことばではなく
教えるための
うそのことばのように



＊愛媛県久万高原町・古岩屋にて

おなじ
ことばでも
ちがう顔があり

ちがう
ことばでも
おなじ顔があるように

どれだけ
ことばを使っても
どうしても伝わらないことがあります

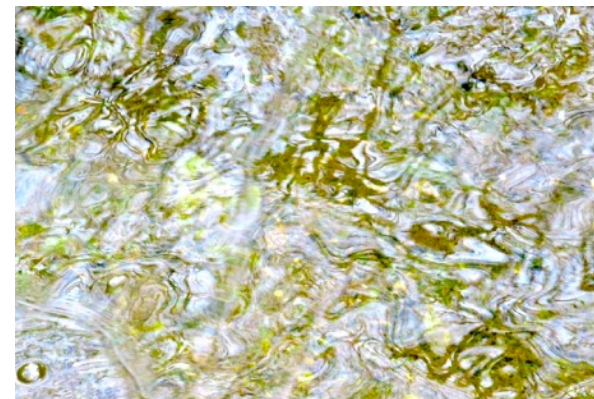
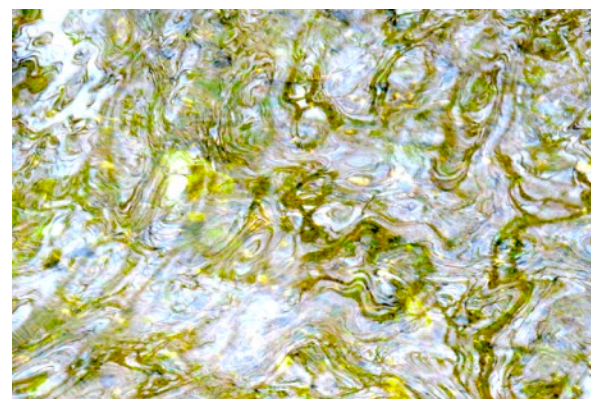
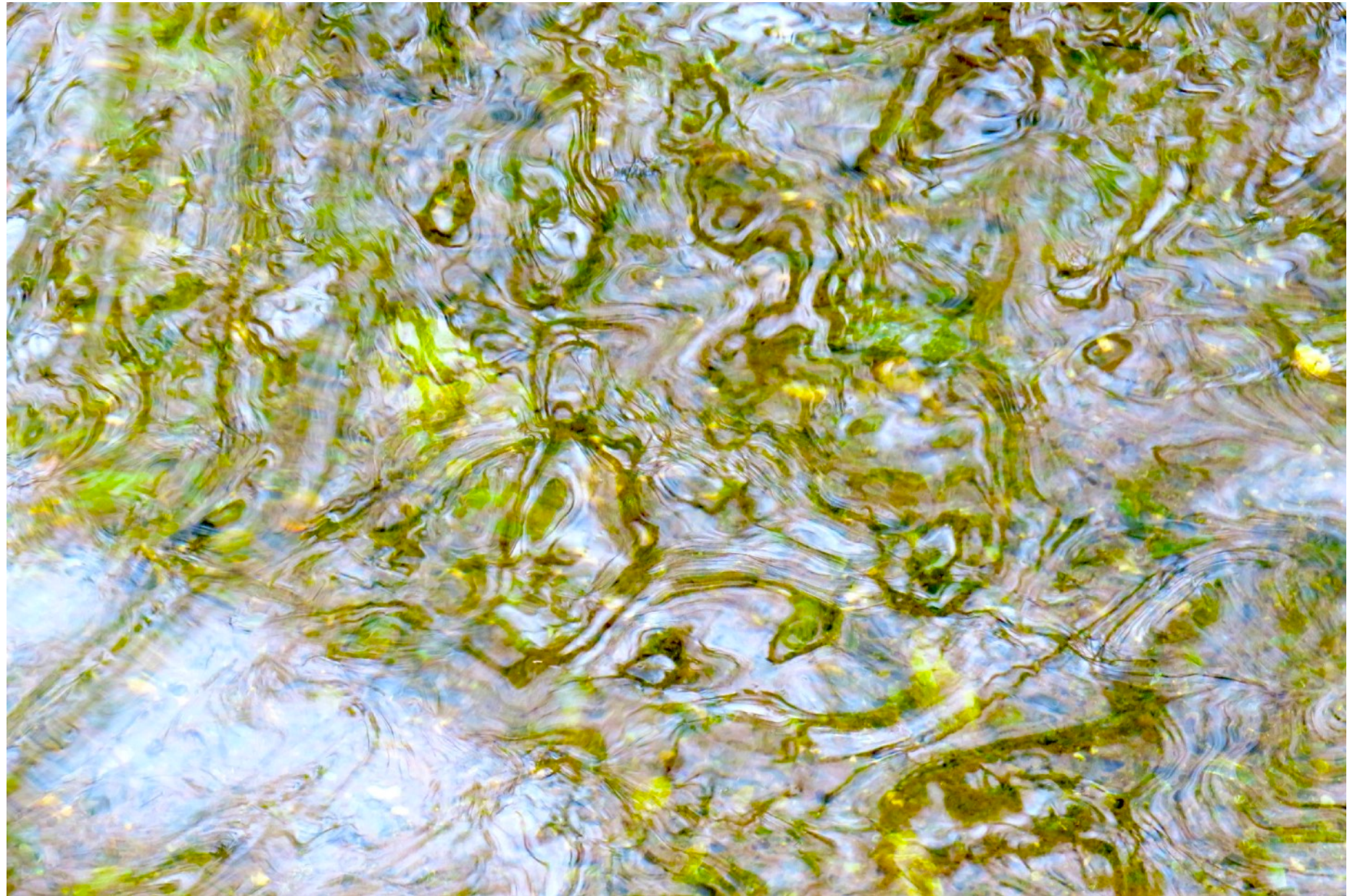
ほんのわずかなことばで
ときには
ことばさえ使わなくても
伝わることがある

おなじ
ひとにも
ちがう顔があり

ちがう
ひとにも
おなじ顔がある

どれだけ
いっしょにいても
どうしてもわかりあえない心があり

ほんのすこしで
ときには
会うことさえなくても
わかりあえる心がある



＊愛媛県久万高原町・古岩屋にて

☆photopos-3528 2024.5.6

ものの
ほんとうは
名づけることができない

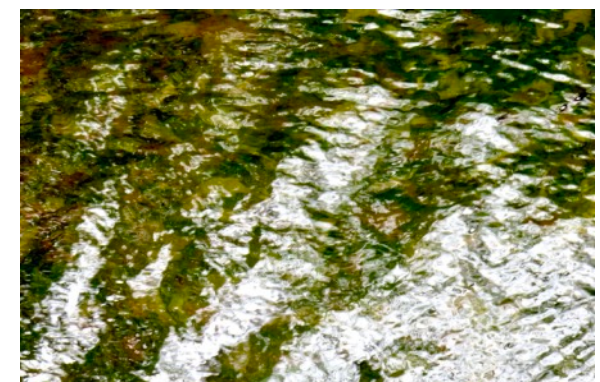
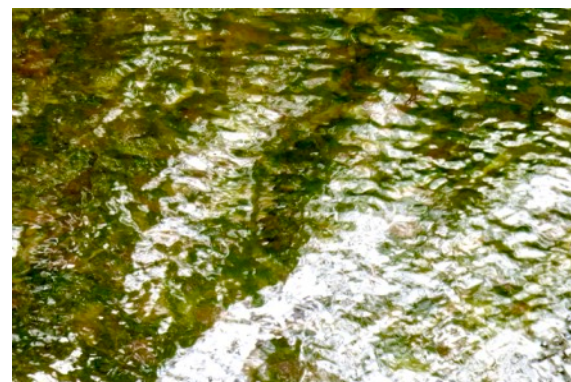
ものを
名に
閉じこめてしまうとき
ものは
死体としてしか
あらわれなくなる

こころの
ほんとうは
言葉にすることができない

こころを
言葉に
閉じこめてしまうとき
こころは
言葉としてしか
あらわせなくなる

ひとの
ほんとうは
みることができない

ひとを
その姿に
閉じこめてしまうとき
ひとは
仮面としてしか
存在できなくなる



＊岡山県新見市哲西町・鯉が窪湿原にて

私とは
だれだろう

私といえるのは
私以外にはいない

と単純にはいえない

私は書く

と書かれている
文字を読むとき

私は私は書くと読む

といえるのだが

じっさいに書いたのが
ほかの私でも
ほかならぬこの私でも

私は私は書くと読む

のである

馬鹿げているように見える問いだが

私は私は書くと読む

ことができるからこそ

私は私以外の私でもある
私の言葉を
じぶんのなかに
住まわせることができる

つまりは憑依し
憑依されることができるのだ

その私が
彼
となっても同じだ

私は彼は書くと読む

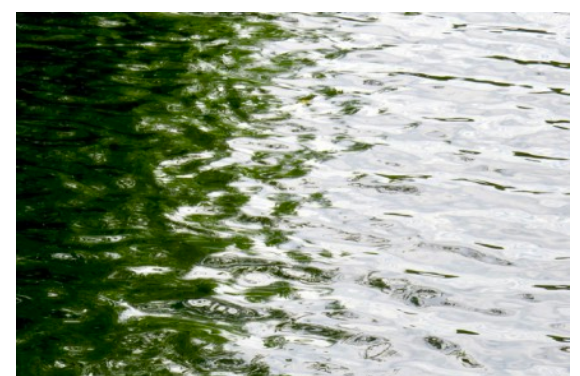
というように
私は彼を
彼の言葉を
じぶんのなかに
住まわせることができる

たとえ
その私や彼の言葉が
この私とまるで異質でも

私は
じぶんのなかに
住まわせることができる

あたりまえのことなのだが
まことに不思議ではないか

その不思議の現象があるからこそ
私は言葉を読むことができる



＊岡山県新見市哲西町・鯉が窪湿原にて

おなじものは
なにひとつないから
せかいはある

にていたとしても
ちがっている

ちがいがあってはじめて
せかいはうまれることができる

せかいはいつも
はじめてあらわれている

おなじことは
なにひとつおこらないから
じかんはある

にていたとしても
ちがっている

ちがいがあってはじめて
じかんはうまれることができる

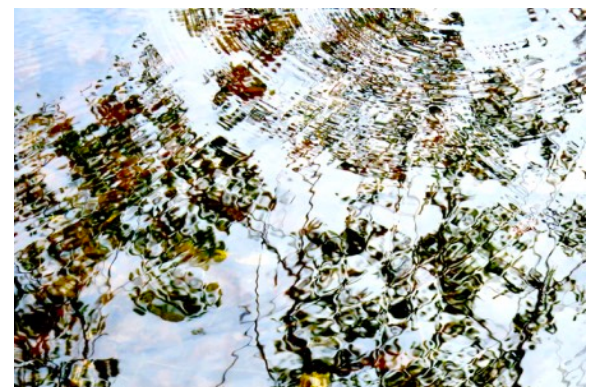
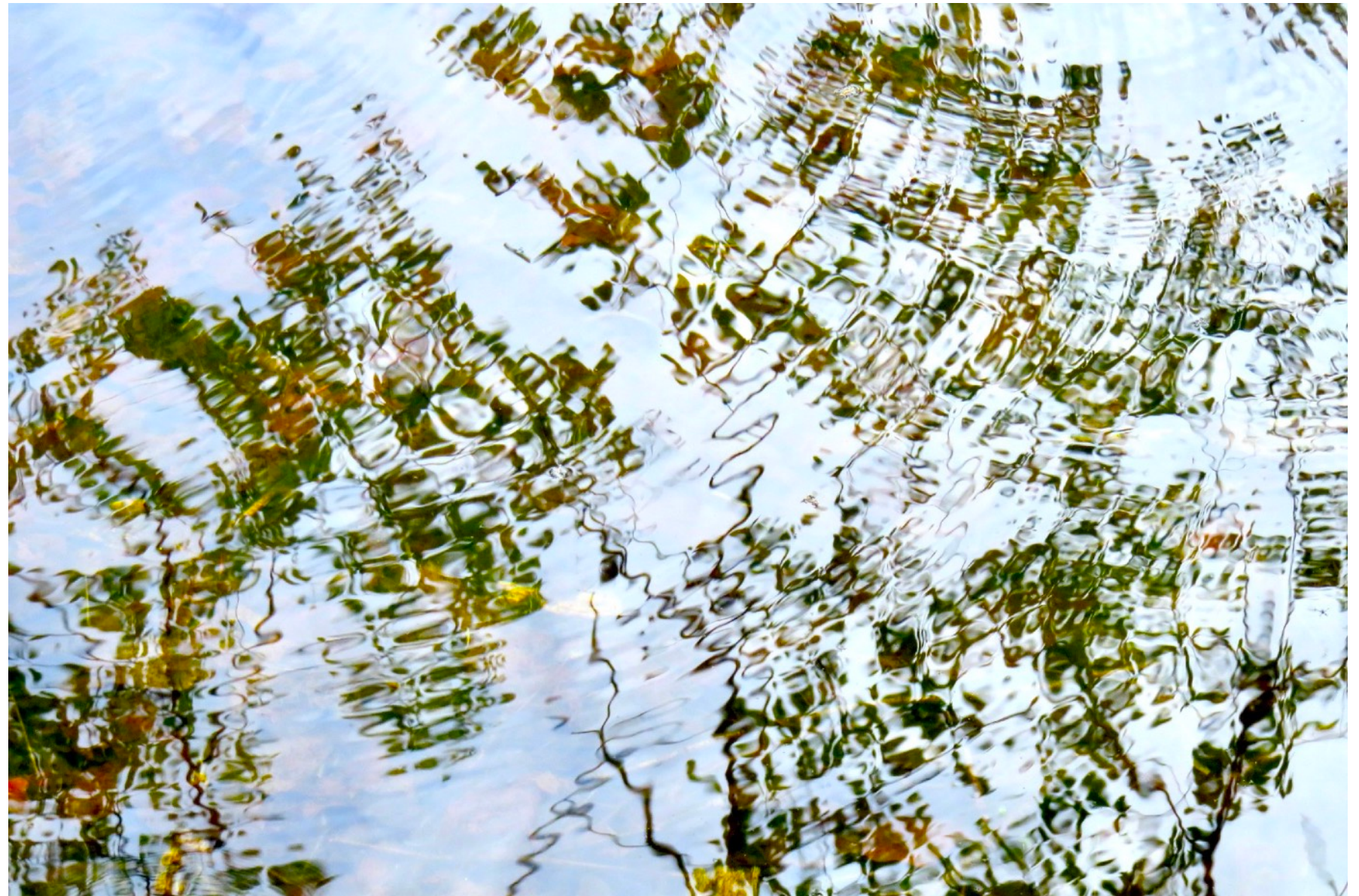
じかんはいつも
はじめてながれている

おなじひとは
だれひとりいないから
わたしはいる

にていたとしても
ちがっている

ちがいがあってはじめて
わたしはうまれることができる

わたしはいつも
はじめてあらわれている



＊岡山県新見市哲西町・鯉が窪湿原にて

かつてひとは
神々から
与えられた
ことばを
声にしていたが

それを
みずからの
ことばとして
語るようになる

神々のことばが
ひとのなかで
ことばとなったのだ

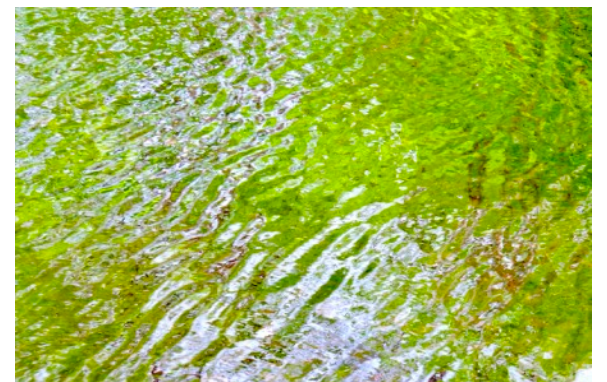
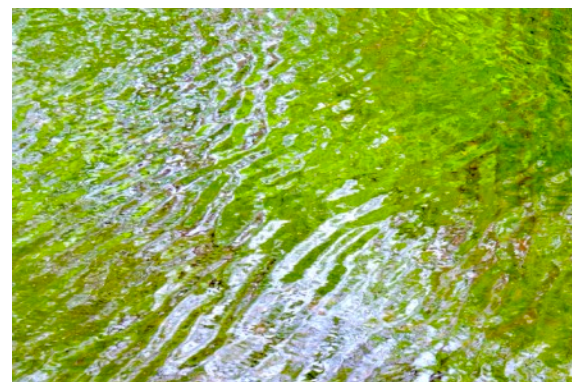
やがてひとは
じぶんこそが
語るのだと思いはじめ
神々のことばは
失われていく

気づくと
ことばはいまや
機械からさえ
与えられるようになり

しだいに
じぶんのことばが
どんなことばなのかさえ
わからなくなりはじめている

じぶんのなかで
語っているのは
機械仕掛けの神々なのか

ほんとうのことばは
どこにあるのだろう



＊岡山県新見市哲西町・鯉が窪湿原にて

☆photopos-3532 2024.5.10

ルールは
ひとを守るのか
それとも縛るのか

ルールのための
ルールはいらない

ルールは
なんのためにあるのか

目的から外れた
ルールはいらない

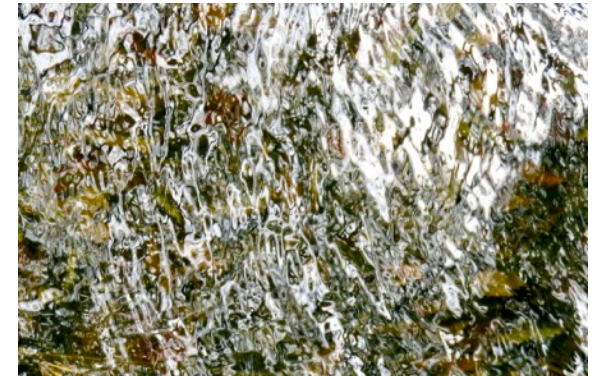
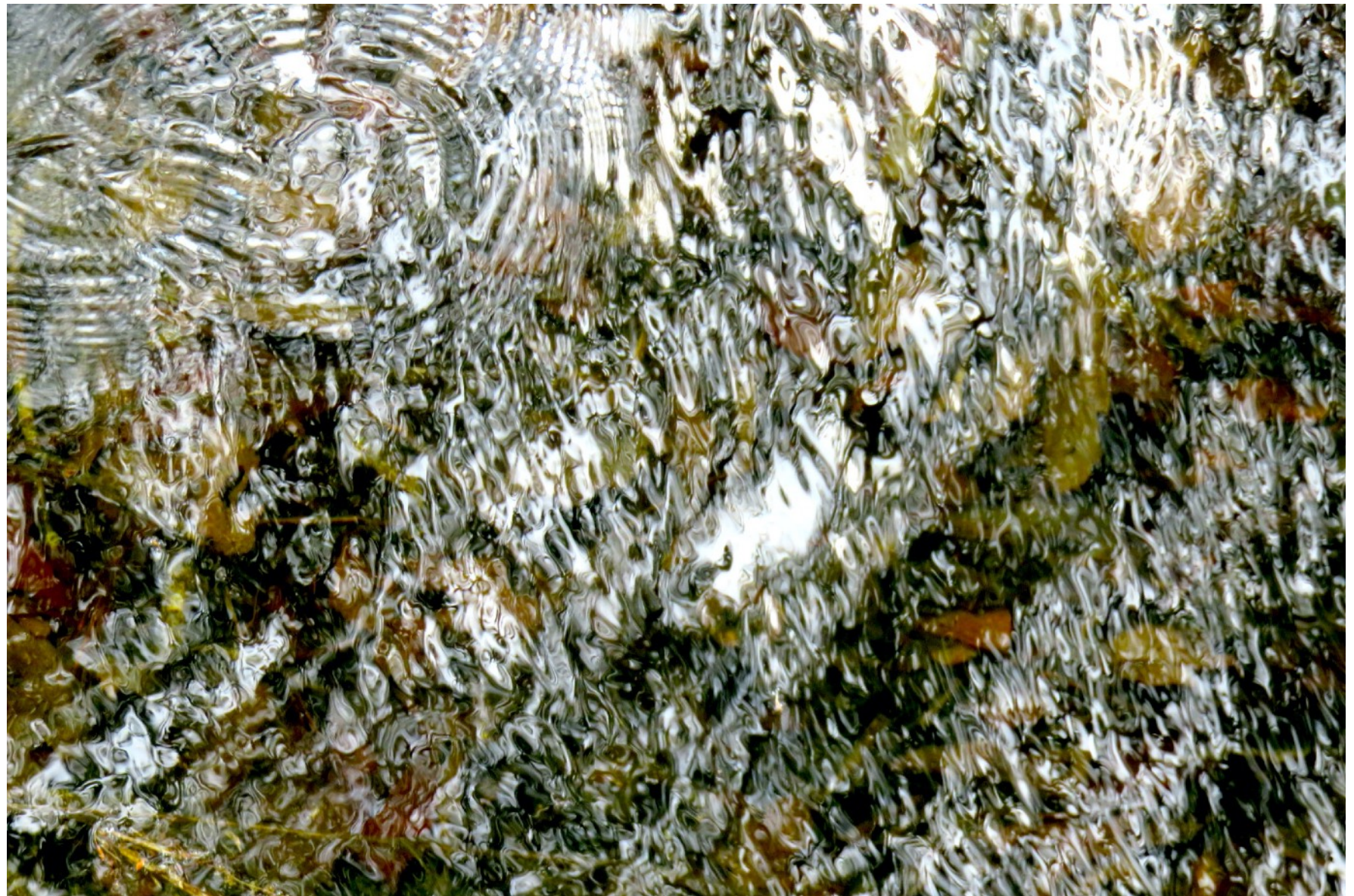
ルールは
だれのためにあるのか

ひとを傷つける
ルールはいらない

ルールは
なぜあるのか

みずからを利するための
ルールではなく

内なる高みから
みずからを導く
ルールでありますように



＊岡山県新見市哲西町・鯉が窪湿原にて

だれかの道は
じぶんの道ではない

みずからが
歩いたところだけが
道になる

道は
教えることも
教えられることもできない

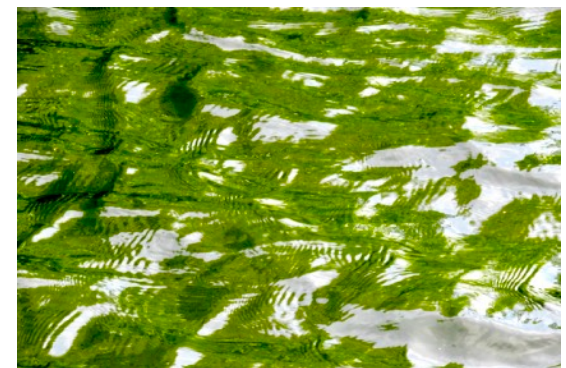
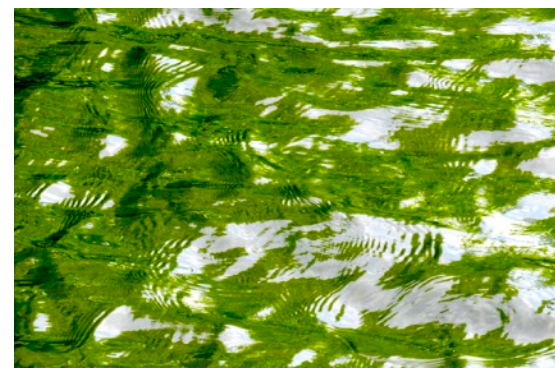
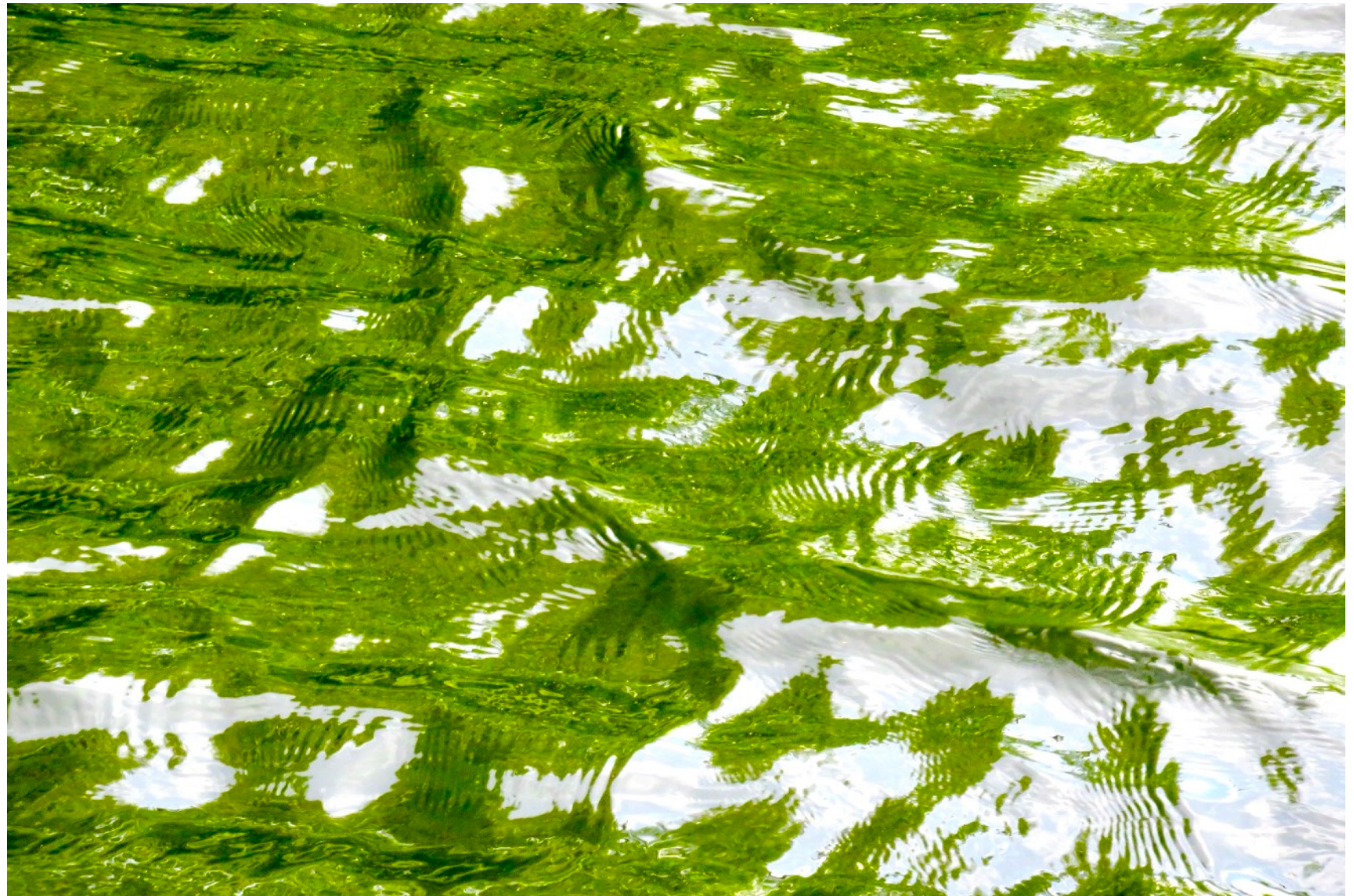
にもかかわらず
これが道だ
これ以外に道はない
道の外を歩いてはならない
そう説く者がいて

その道がなんなのか
たしかめることのないまま
みずからは道を歩まず
道を説く者に従う者が生まれ

そこで説かれた道に従うことで
みずからが道を説く者となり
これだけが道だ
この道を歩くことで
安心を得ることができる
そう説く者が生まれる

そして
だれも道がなんのかなど
ほんとうにはわからないまま
道についての言葉は法となり
説かれ示された道だけを
歩かなければならなくなる

そしてときにあらわれる
教えられた道の外に行く者を
異端者や狂人など
外道の名で呼ぶようになる



＊岡山県新見市哲西町・鯉が窪湿原にて

わたしは
わたし
だれかは
だれか

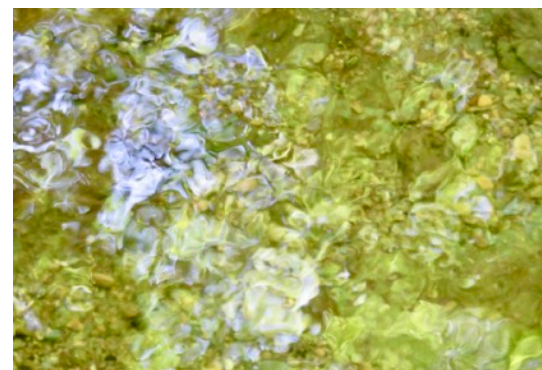
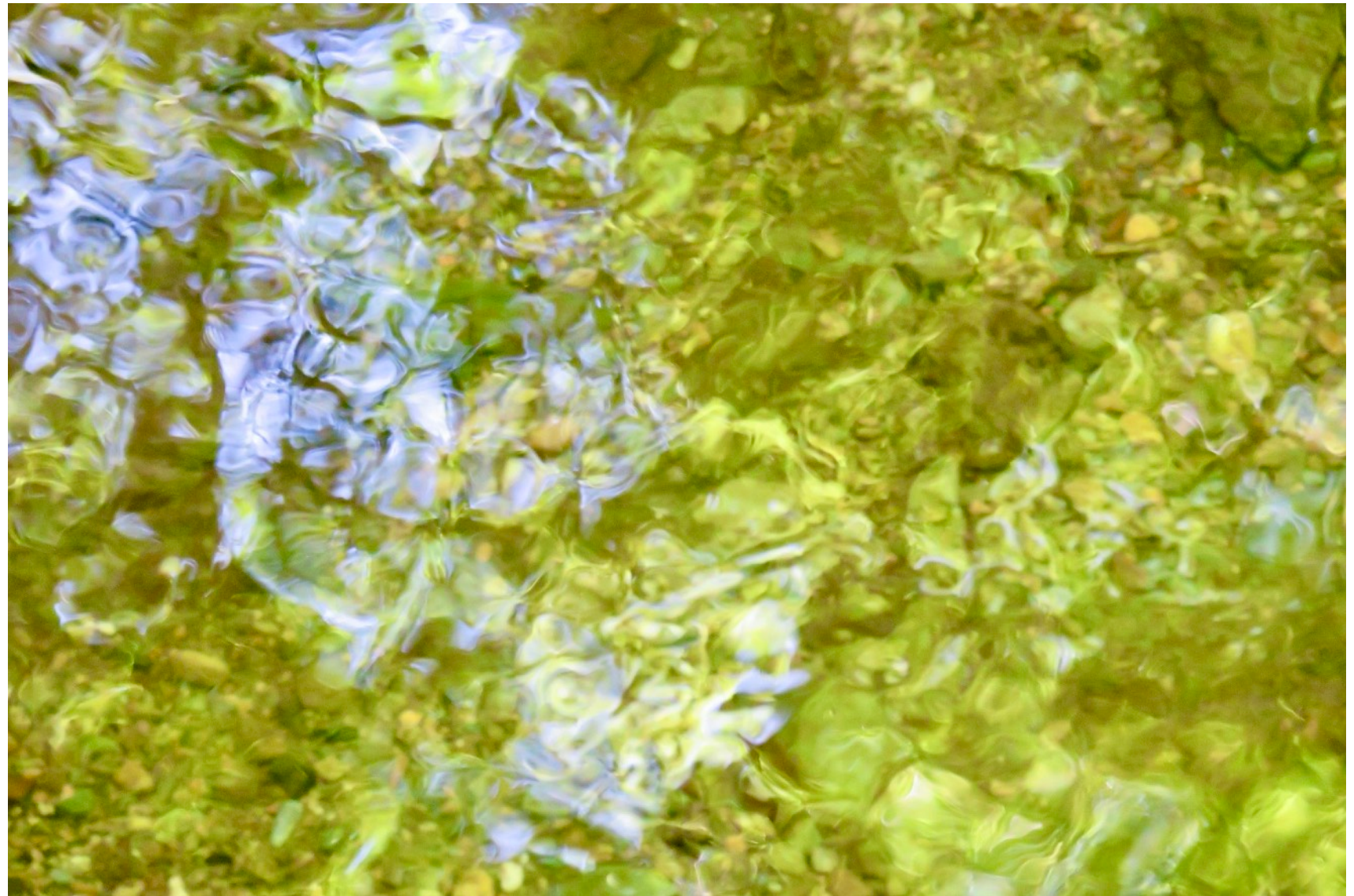
けれど
わたしは
だれかのなかに
だれかは
わたしのなかに

だから
たとえなにが
あったとしても
今日のおしまいは
ただ グッドナイト！

ひとりで
生まれ
ひとりで
死んでいく

けれど
一人は
みんなのなかに
みんなは
ひとりのなかに

だから
たとえどんな
生だったとしても
そのおしまいは
ただ グッドラック！



＊愛媛県久万高原町・古岩屋にて

匂いが
わからなくなると

うそ
と
ほんとう
が
わからなくなる
から

ことばの匂いのする
声や文字からも
うそ
と
ほんとう
を
かぎわけられなければならない

マスクをさせるのは
匂いを
わからなくするためだ

うそを
うそだと
わからなくするために…

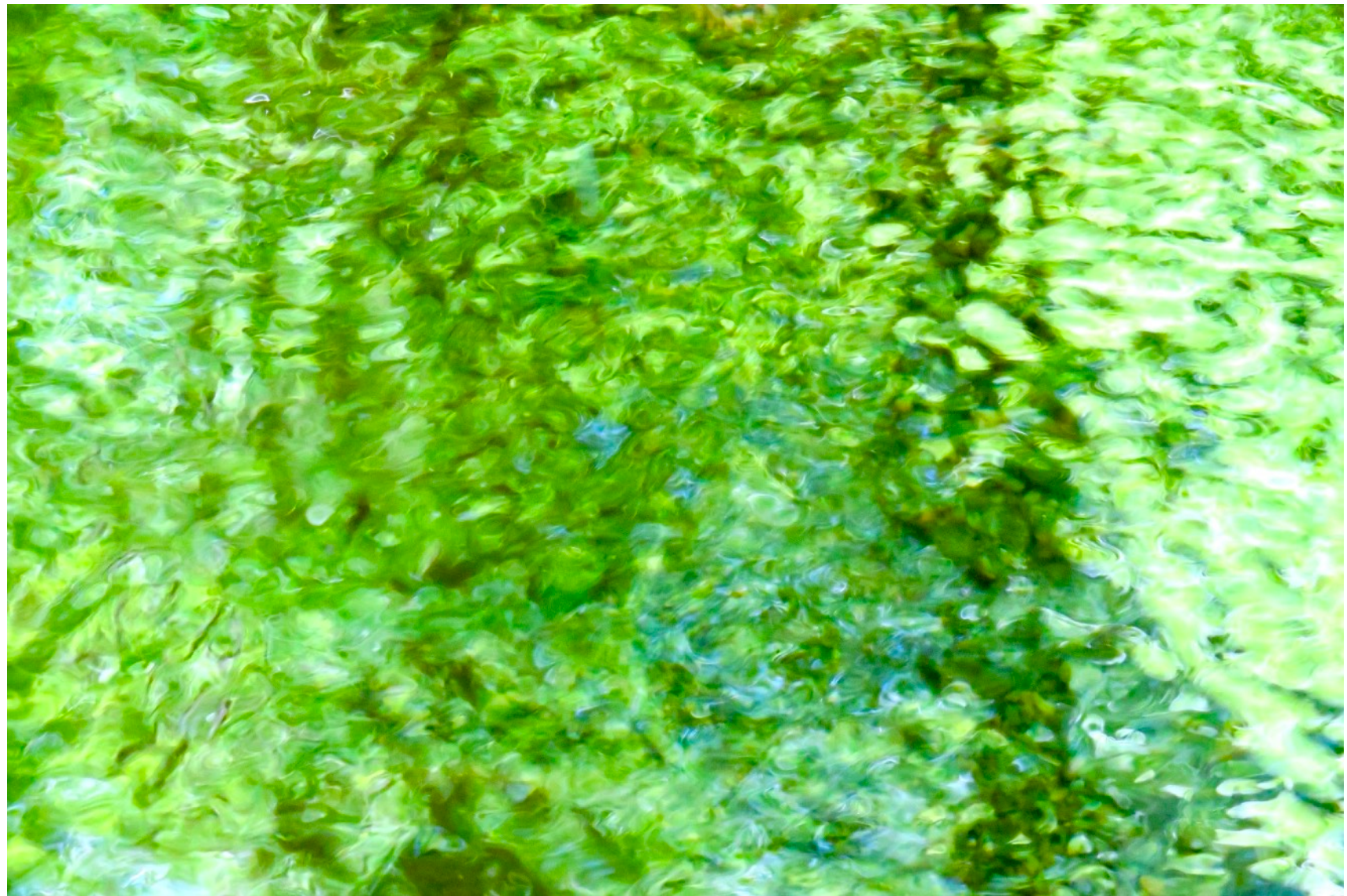
匂いを思い出す

じぶんのほんとうを
思い出すために

匂いを深める

ほんとうを
知るために

そして
永遠のなかで
わたしという匂い
あなたという匂いを
かぎわけられるように



＊愛媛県久万高原町・古岩屋にて

このからだに
生まれて

このからだ
から
逃げたいとおもい

このところで
生きてきて

このところ
から
逃げたいとおもい

べつのからだ
べつのところを
求めるとき

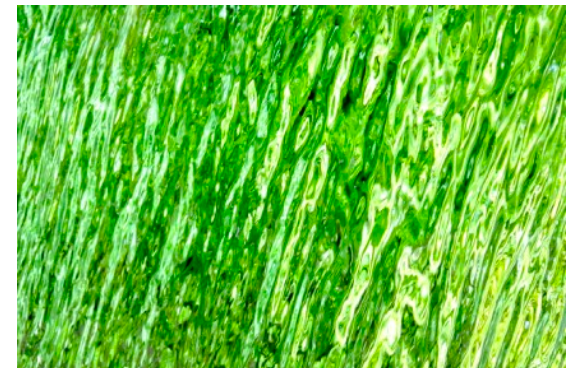
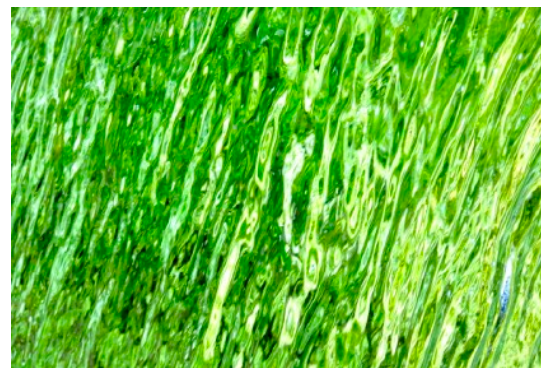
つかのま
変身してみるのも
ひとつの方法だろうが

その変身はおそらく
長くはつづかない

けれど
魂において
変容することは
できるだろう

そのためには
このからだ
このところから
離れないでいることだ

そして
その謎の深みへと
道を歩いていく…



＊愛媛県久万高原町・古岩屋にて

歌の如く
彼方から
送られる
ふしぎの
ことばが

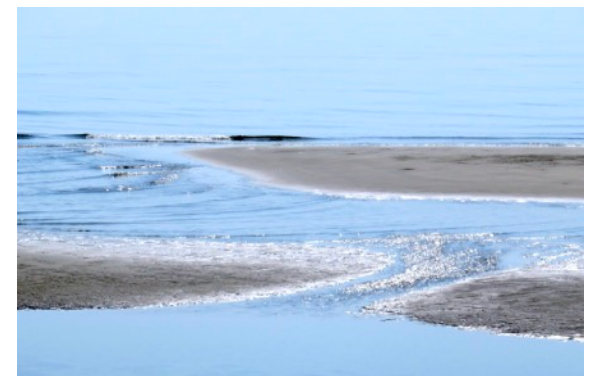
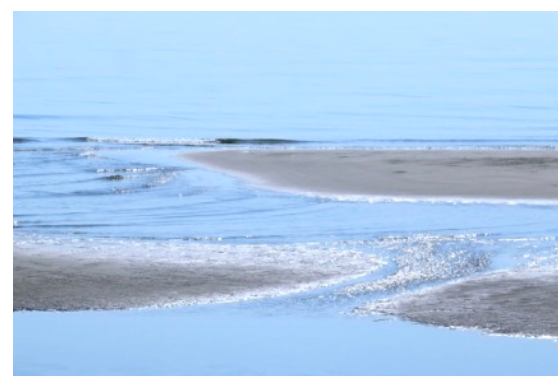
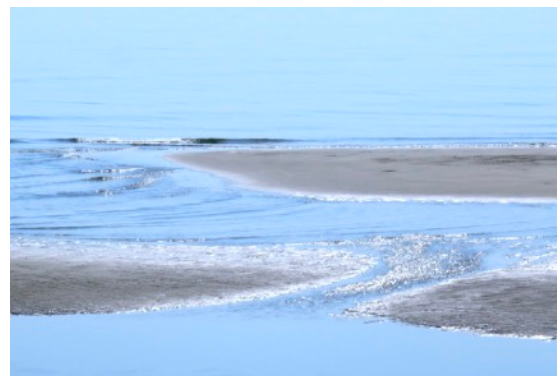
寄せる波
返す波の
あいだに
繰り返し
記される

わたしは
からだを
ひらいて
その歌を
呼吸する

わたしは
どこから
きたのか
どこへと
ゆくのか

寄せ返す
波の如く
問いかけ
問い返し

わたしは
彼方此方
時の間を
戯れ遊ぶ



＊愛媛県松山市・重信川河口にて

現生人類は
知恵ある人
ホモ・サピエンス
と称されるが
果たして
サピエンスなのか

悪知恵も
サピエンスではあるだろうが
悪知恵だけでは
サピエンス返上ではないか

それよりも
人が人であるのは
ホモ・ファール
つくる人だからだろう

つくるとは
ポイエーシス
つくることができて
はじめてポエジーは生まれる

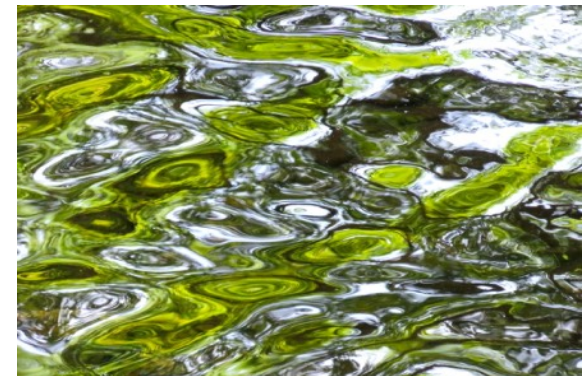
すべてのひとは
なにがしか
職人である

じぶんのなかの職人を
等閑にするとき
創造することもまた
等閑にすることになる

そして
職人であるがゆえに
ホモ・ルーデンス
遊ぶ人にもなれる

遊びをせんとや
生まれけん

人類すべてが
ホモ・ルーデンスに
なれますように



＊愛媛県久万高原町・古岩屋にて

いのちの水は
かたちをもたないから

それを蓄えるため
わたしは器となるが

器が壊れるとき
いのちの水は
わたしから
零れ落ちてしまう

たとえ
器があったとしても
いのちの水を
得られなければ
器の意味は失われる

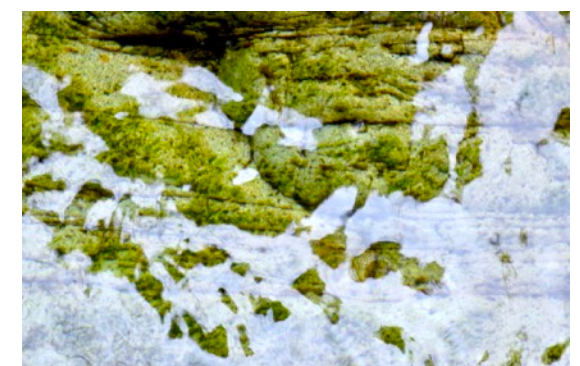
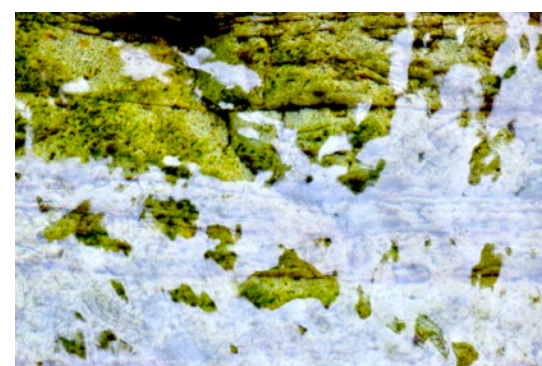
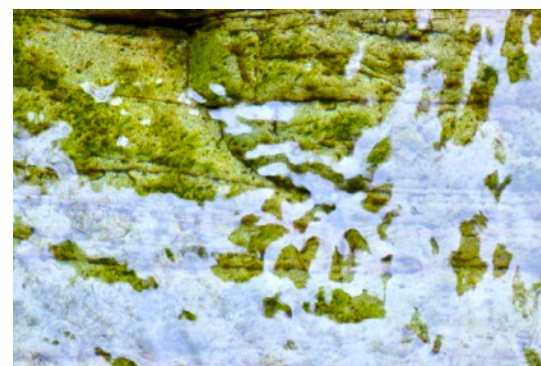
ことばは
いのちの水のようだ

ことばを使うには
器をつくらねばならない

蓄えられたことばは
わたしを生かしてくれるが

器のかたちに
合わないことばを
容れることはできない

そして
器が壊れるとき
蓄えられたことばも
わたしから
逃れ去ってしまう



＊愛媛県久万高原町・面河溪にて

悪はあるか
善があるように

あるいは
善はあるか
悪があるように

善は
みずからを
善として
善をなしているのだろうか

正しき道をゆくことを
善だというのであれば
なにが正しいかが
明らかでなければならないが

正しさは
どこからくるのだろう

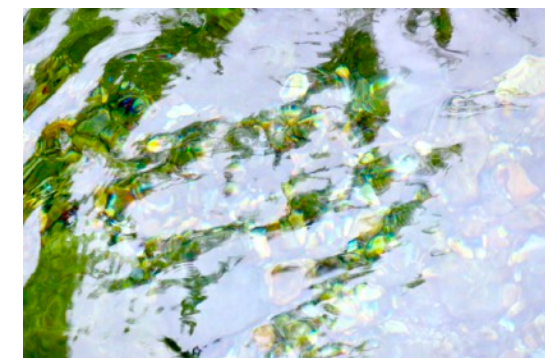
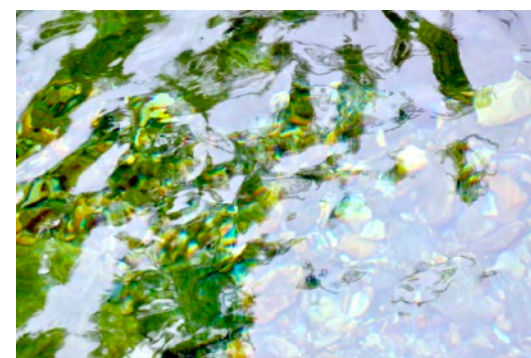
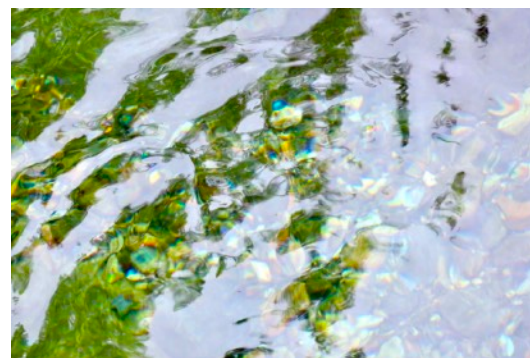
ときに
正しさは
迷路のなかにありはしないか

悪は
みずからを
悪として
悪をなしているのだろうか

間違った道をゆくことを
悪だというのであれば
なにが間違っているのかが
明らかでなければならないが

間違いは
どこで起こるのだろう

そして
悪がみずからの間違いに気づき
それを正そうとするとき
そこではなにが起きているのだろう



＊愛媛県久万高原町・面河溪にて

写真で
写せるもの

それは
光でとらえられる
表面だけだとしても

ほんとうに写すとは
その奥にある
光ではとらえられないものを
写しだそうとすることである

そのためには
見えないものを
見ることのできる
眼が必要となる

言葉で
語れること

それは
言葉でとらえられる
表現だけだとしても

ほんとうに語るとは
その奥にある
言葉では語れないことを
あえて語ろうとすることである

そのためには
語れないでいることを
読みとることのできる
心眼が必要となる



＊愛媛県総合運動公園にて

かつて
楽園にいた

楽園には
調和と平安があった

なぜ
蛇の言葉に従って
知恵の実を食べたのか

楽園にないものを
求めたからだ

楽園にないものは
違いである

違いは
調和と平安を
壊してしまうから

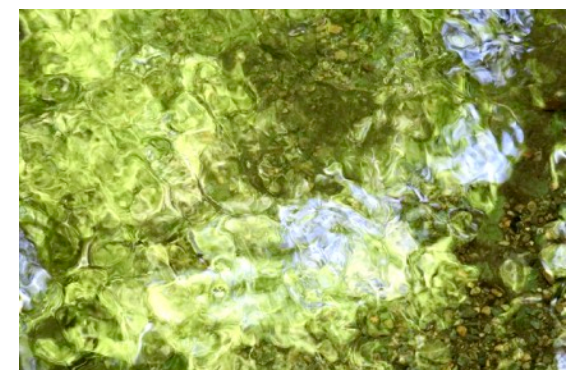
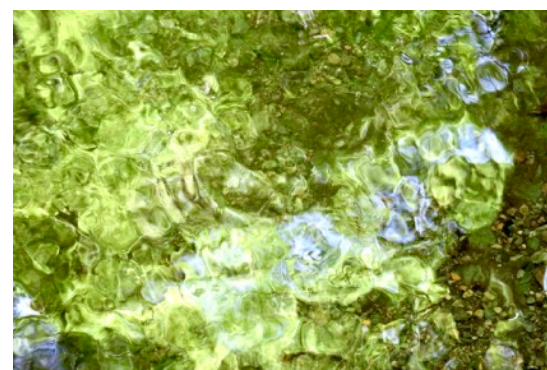
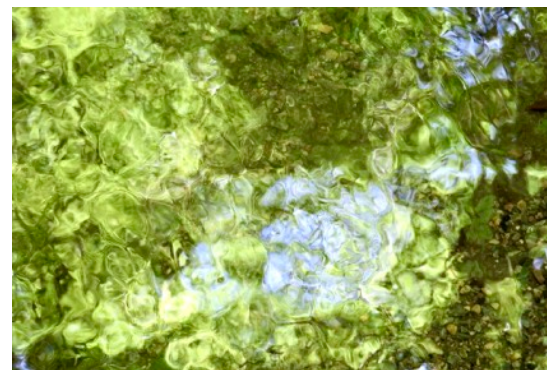
楽園の外では
無数の感覚が燦めきはじめる

感覚は望み
感覚は競い
感覚は知ろうとする

もはや
楽園に戻ることはできない

楽園の外で
知恵の実とは
なんだったのか考える

楽園とはなにか
楽園の不在とはなにかを



＊愛媛県久万高原町・古岩屋にて

水の流れを
見るように
心の流れは見えるか

流れて
どこへ向かうか

流されないでいる
心はあるか

流れる心をつめる
もうひとつの心はあるか

もうひとつの心は
そこからひらかれてゆく

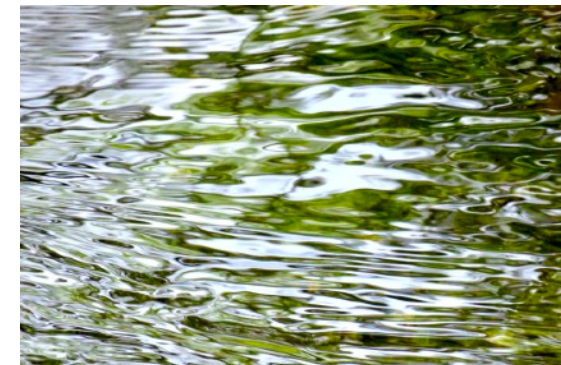
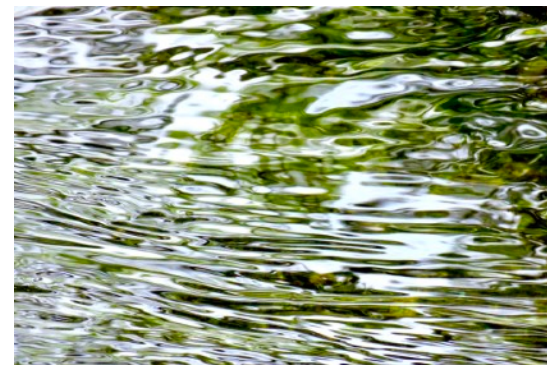
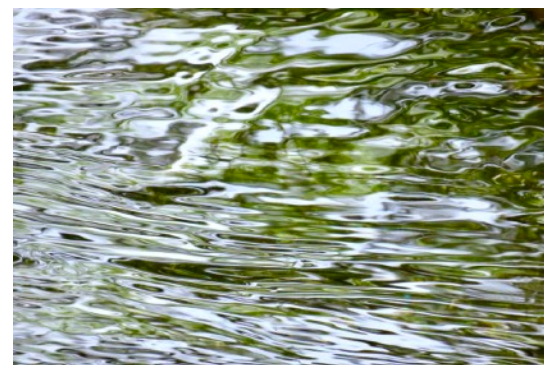
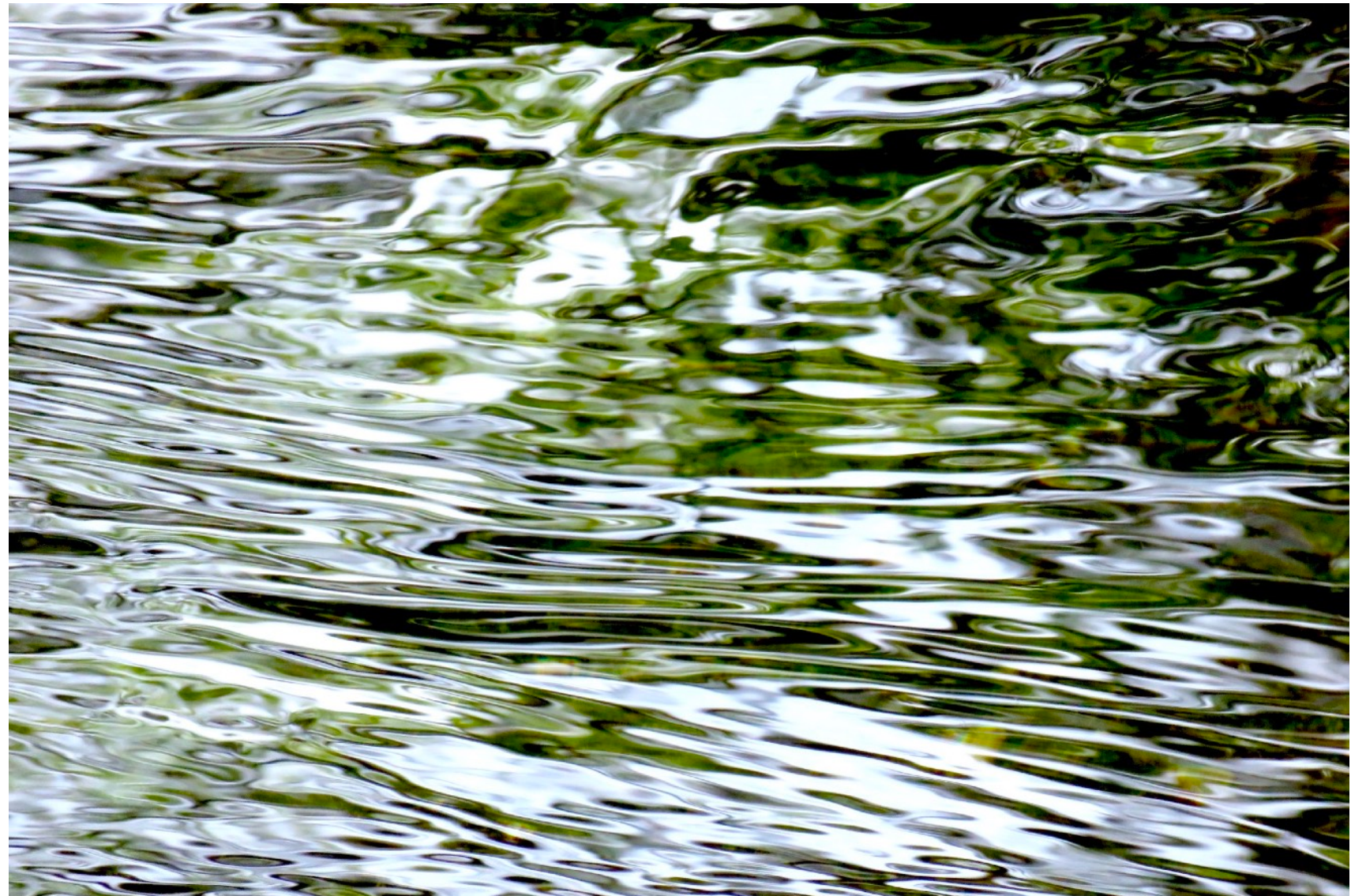
火の燃え盛るのを
見るように
心の燃え盛るのは見えるか

燃えて
どうなるか

燃え尽きない
心はあるか

燃え盛る心をつめる
もうひとつの心はあるか

もうひとつの心は
そこからひらかれてゆく



＊愛媛県久万高原町・古岩屋にて

ひとは
騙らずには
生きてゆけないから

語りは
騙りにもなるが
騙りゆえに
糧になりもする

騙りの果てにこそ
ほんとうの言葉で語るために

ひとは
意味にとらわれずには
生きてはゆけないから

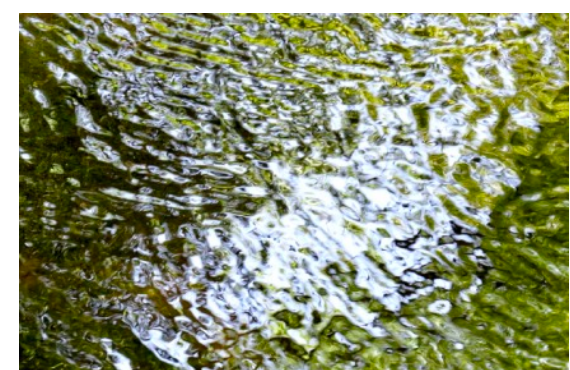
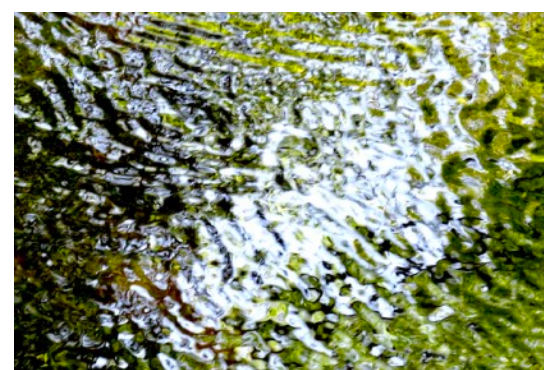
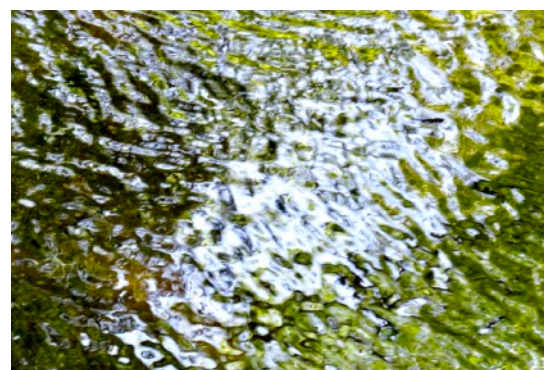
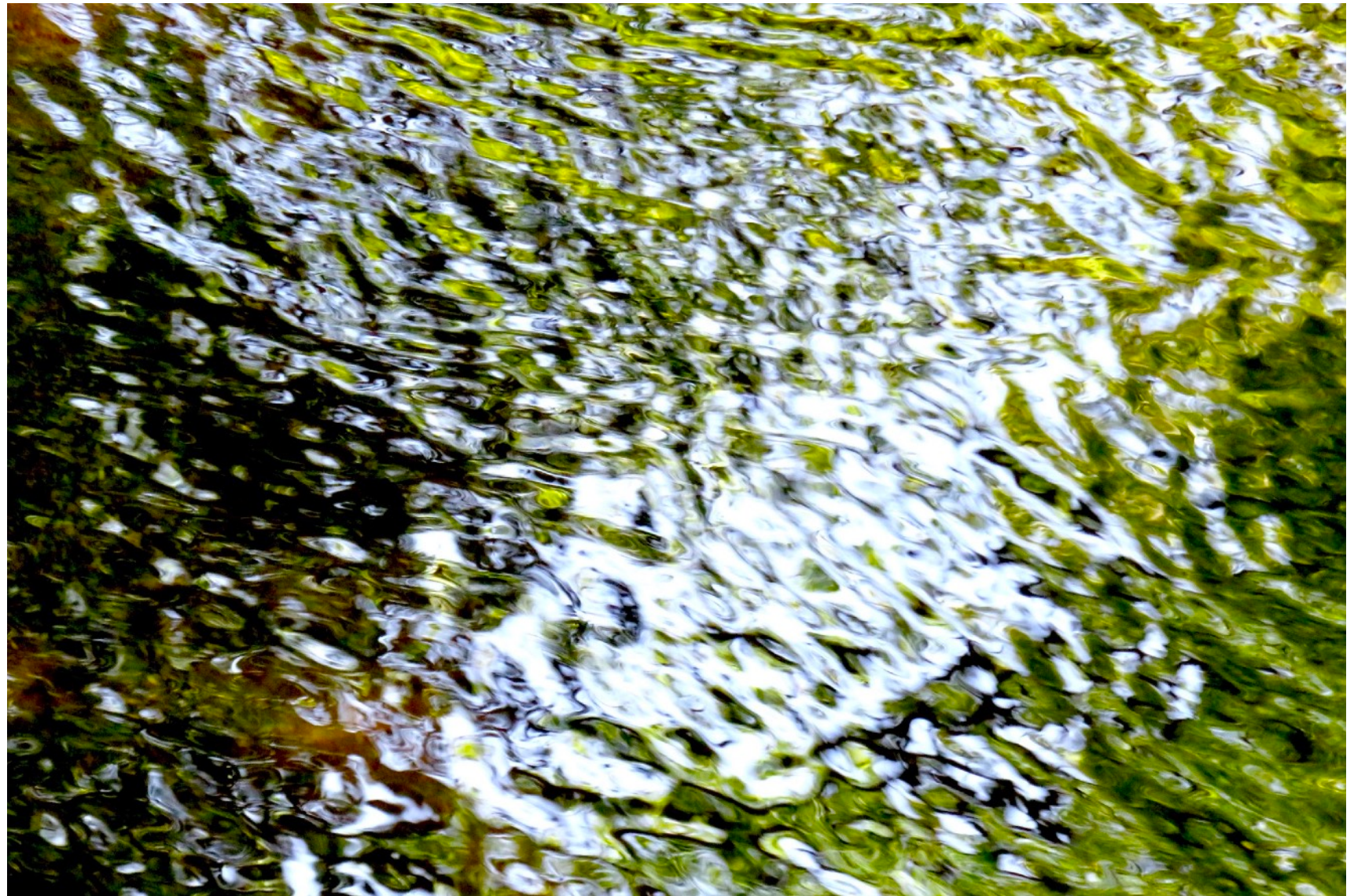
意味を拒み
忌みとするときもあるが
忌みゆえの沈黙が
美味となりもする

沈黙の果てにこそ
ほんとうの意味を見つけるために

ひとは
愛さずには
生きてゆけないから

愛は
哀にもなるが
哀ゆえに
詠となりもする

哀しみの果てにこそ
ほんとうの愛を詠えるように



*愛媛県久万高原町・古岩屋にて

世界がここに
あることは

時間がここに
生まれることだ

時間がここに
あることは

意識がここに
生まれることだ

意識がここに
あることは

わたしがここに
いることだ

ひとの数だけ
時間があって

ひとの数だけ
意識があって

わたしのなかにも
たくさんあって

あなたのなかにも
たくさんあって

世界のふしぎは
わたしとあなた

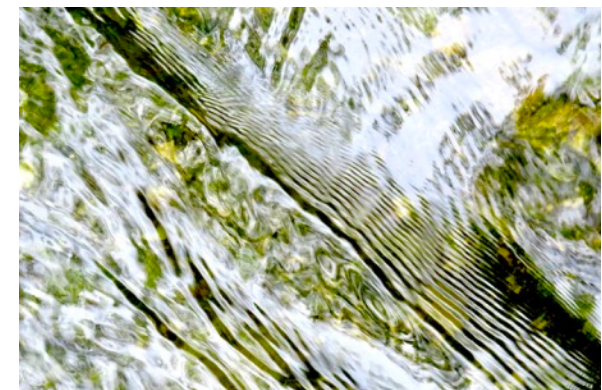
いまをいきてる
わたしとあなた

ともに時間を
過ごせることだ

世界がここに
あることは

新しいいまが
あることだ

わたしとあなたが
いることだ



＊愛媛県久万高原町・古岩屋にて

神は死んだ

哲学者は
生の途上で
死を知らぬまま
そう告げた

けれど
神は
死を知らない
生さえも知らないから

生まれ生まれ生まれ生まれて
生の始めに暗く
死に死に死に死んで
死の終りに冥し

宗教者は
行の途上
生の只中で
そう告げた

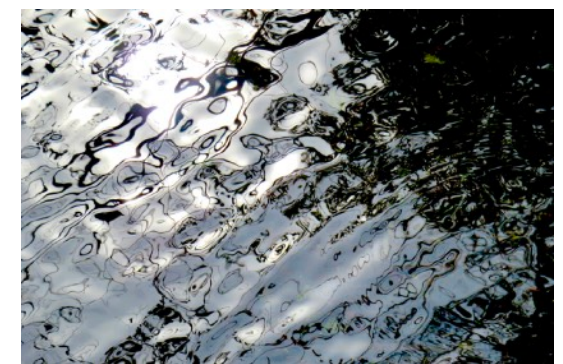
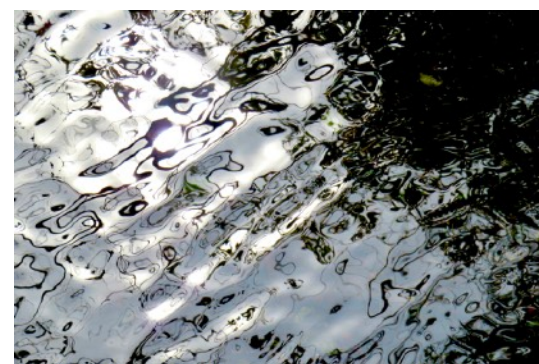
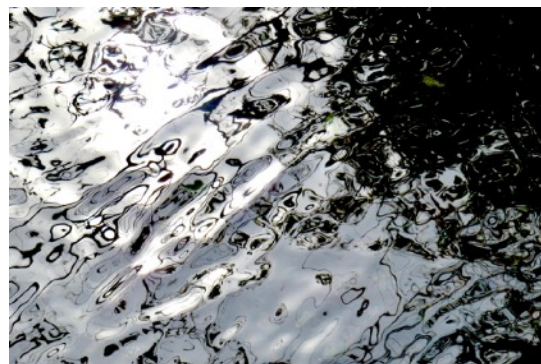
はたして
生のはじめは暗く
死の終わりは冥いのだろうか

われらは
生を知るため
生を知ること
死を知るため
生まれてきた

神さえ知らない
生と死の只中に
すべてが
ありはしないか

死はいまだ訪れず
生の途上にあるいま

恐れるのは
死ではない
恐れ畏れるのは
生きることだ



＊愛媛県久万高原町・面河溪にて

わたしたちには
感覚という窓がある

窓は
五つあるとも
一二あるともいわれる

感覚器官があり
感覚のとらえる対象があり
感覚でとらえられる知覚があり
それらによって
わたしたちに世界があらわれる

わたしたちが
どう生きるかは
窓をどのようにひらくか
そのことで大きく変わる

すべての窓から
たしかに見えるものの世界を
ひらければいいのだが
ひとが窓を開く仕方は部分的で
世界は無限に多様な姿をとってあらわれる

見える人には見えるものも
見えない人には見えず
見える人にはわからないことも
見えない人にはわかったりする

その違いが
ひとの違いを際立たせ
それが優劣だとさえ
みなされてしまうことで
差別や争いさえも生まれる

わたしたちには
感覚という窓がある

じぶんは窓をどのようにひらいているか
ひとは窓をどのようにひらいているか
その違いを見るためにも
窓がひらかれていきますように



＊愛媛県内子町・小田深山溪谷にて

夢の
入れ子の
果てしなく

夢から覚めても夢
その夢から覚めても
また夢

現（うつ）の
入れ子の
果てしなく

現から覚めても現
その現から覚めても
また現

私があるのは
疑えないだろうか

コギト・エルゴ・スム は
ほんとうなのか

私の入れ子も
果てしなく

私から覚めても私
その私から覚めても
また私

夢の現
現の夢のなかで



*愛媛県内子町・小田深山溪谷にて

お金がすべてのひとも
お金で買えないものをこそ
求めてやまないのに

ほんとうにほしいものは
買えないからこそ
お金がすべてになる

与えられるものは
与えることの
対価ではない

与えることと
与えられることは

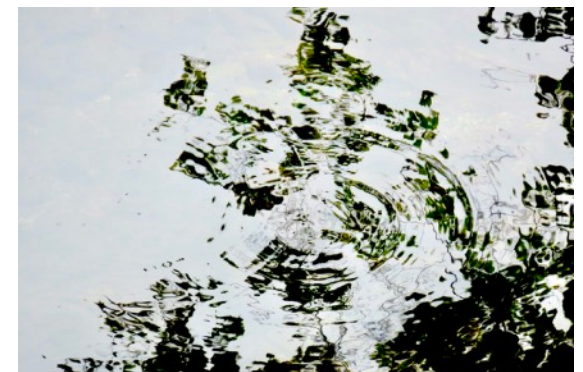
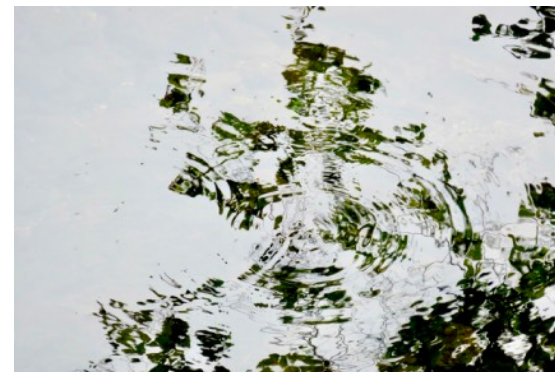
愛することと
愛されることのように

ときに時空を超え
不思議な関係で
ともにむすばれている

愛は対価ではないから
愛するから愛されるのではない

わたしはただ愛する
そしてただ愛される

そこには
時空を超えた
愛の魔法が働いている



＊愛媛県内子町・小田深山溪谷にて

知を誇る者は
知らないとは言えない

知らないといえる知は
そこにはない

知を誇る者に従う者は
自由を恐れる

与えられた夢から
醒めたくはないからだ

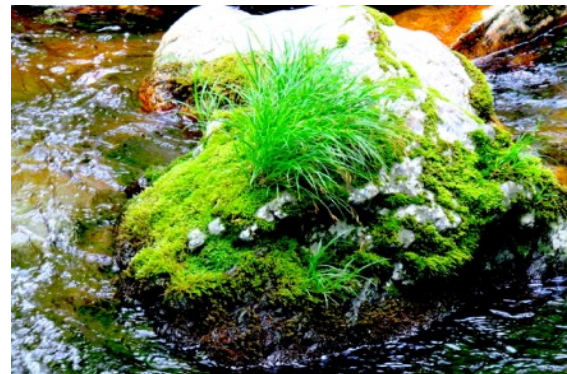
知識人
有名人は
夢のように語る

「知性の差が
顔に出るらしい」が
どんな顔をして語るのか

夢から醒めよ
そう語る者の声が
聞かれることはない

夢から醒めても
道は見えないからだ

道は与えられない
ただ歩いていだけ
そこに知は生まれる



＊愛媛県内子町・小田深山溪谷にて